The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

後山外派説における相即の譬喩

弓場苗生子

宋代における天台宗内部の教義論争、所謂山家山外の争いは、いくつかの焦点をめぐって展開した。本来常寂の境界において諸差別が相として宛然と具わっているとすべきか否か、という問題もその一つである。これを三諦について見れば、仮諦のみならず空・中二諦にも三千相が存する、すなわち有相であるとするか否か、というように換言し得る。山外派の諸師が山家所説の三諦各具三千の論に批判を加え、これに対して三千相を仮諦の分際のみに留めるべきことを主張したものが、所謂唯仮三千（妙仮三千）の説である。この説はとりわけ後山外派と称される仁岳・従義の強調するところとなった。

この唯仮三千の主張は、山家との如何なる思想的相異を反映したものか。安藤俊雄氏は両派の立場の違いを以て、山家派は極相異、すなわち他宗の教学に対して天台の特色たる性具説を顕揚することを旨としたのに対し、後山外派は極相順、すなわち他宗の教学との融和を目指したのであると評する。(1)

また近年の陳英善氏の研究においては、山家は仮の側面を重視し、後山外の両師は空・中の理体を重視して各々具義を説いたと解釈している。(2) いずれも「具」の観点よりした分析と言えるが、ここではむしろ「即」の観点から検討してみたいと思う。そもそも山家教学においては、真如の境界においても諸差別相が宛然と「具」わると説き、これによってはじめて当体全是の「即」が成り立つとする。(3) すなわち有無・善悪等の二元対立は同体の内に統一される。よって山外派の言の如く具を仮諦の範疇にのみ限定し、三諦の内に無相と有相とを分かって対比させたならば、その二者は全く矛盾するものとなり相即は成り立ち得ないということになる。当体不二の相即を取らないのであれば、仁岳・従義はこの問題を如何にして解決するのか。しかしながら仏教文献における「即」の語は頗る基礎的かつ頻用されるものであるから、論者がこの語に対して如何なる相即関係の表象を投影しているかを見極めるのは困難である。そこで本稿ではこの相即の関係を表示

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

するために用いられた譬喩に照らして、両師による唯仮三千の立論を改めて検証することとする。これは譬喩による表現によって、論者が相即の関係をどのようなものとして把握しているかを端的に知る為である。思うに知礼が三種相即を開説した所以もまた自身の取るところの当体全是の即義を表象として示すことにあっただろう。翻って仁岳・従義の両師についてこれを見たなら、その即義の表象は果して鏡像・如意珠等によって示されるのである。可観撰『山家義苑』巻上に引かれる仁岳の「三千書」には、『法華文句記』巻一下の「鏡明性十界、像生修十界。」(4)の文について次のように言う。

書曰、妙楽云、鏡明性十界、像生修十界。応レ知、此有二両重無住本立法之義一。一則約レ性自辨。鏡喩二実相一、即無住本也。明喩二十界一、即所立法也。一則修性対辨。鏡・明合為二無住本一、像生十界即所立之法、故十界之法、在レ修在レ性、皆是末事。今有下稟二指要鈔一者、謂中三千皆実、相相宛然、修性本末二俱有相上。仍謂二鏡喩未レ親、一何妄想。(5)

まず性においての本末として「鏡明性十界」の一句の内に能立の無住本（鏡）と所立の十界（明）との二分を設け、ここに第一重の無相・有相の対が存するとする。『法華文句記』の意は、この性の境界における二を合して一句とし、さらに修（像生）の十界に相対させて対句とするものであると説明している。見る限り湛然の原意においてこのような両重が意識されていたとは必ずしも言えないように思うが、仁岳が強いてこの判を立てて会通を為した意図は、何よりも三諦における一と多との対立を守り、無住本の境界の無相を主張する為に他ならない。故に続けて山家の伝習者が「修性本末二俱有相」として修性各々が有相であると誤解するのを斥けるのである。また文末の「仍謂二鏡喩未レ親、……。」の言から、『止観輔行伝弘決』巻一之五に見える「夫以レ事喩レ法、皆是分喩。於レ中鏡喩、其意最親。何者、遍レ鏡是明、遍レ明是像。非並非別、不縦不横、有レ異二伊字・天目一故也。」(6)という記述が踏まえられていることが知られる。これは『摩訶止観』巻一下において一念即空即仮即中を説くなか、「明喩二即空一、像喩二即仮一、鏡喩二即中一。」(7)として鏡・明・像の不合不散・合散宛然の関係を以て譬喩を為した文に対する註釈であり、ここにおいて三諦の円融の関係を表象するに、鏡像喩が最も適切であることを歎じた箇所である。すなわち鏡体と光照と現ずるところの諸差別相とは、三諦における一即多・多即一の相即を含意するものであり、これは伊字・天目の譬喩によっては表示し得ない内容であると説くのである。

如意珠喩もまた唯仮三千を論ずる際に用いられるものである。まず智顗においてこの譬喩の用例を見るに、『法華玄義』巻五下には資成軌を明かして「三法不二一異一。如下点二如意珠一中、論レ光論上レ宝。光・宝不二与レ珠一一、不二与レ珠異一。不縦不横。三法亦如レ是。亦一亦非一、亦非一非非一。不可思議之

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

三法也。[8]」と言い、前掲の『摩訶止観』の鏡像喩同様、三法相互の不一不異の関係を珠・光・宝に譬えている。これを三諦に配するときは珠が中、光が空、宝が仮に当たり、如意珠の不可思議な妙用によって現出されるところの衆多の宝物と等置されることで、仮の諸差別相としての性格が含意されるのである。しかるに、仁岳は灌頂の文を援引して因中有果の外道見に堕するものであると山家説を対破したが、ここにおいて自らの取るところを論ずるに当たり、如意珠の譬喩を用いている点に注目したい。『四明仁岳異説叢書』巻三の「岳闍梨雪謗書」には仁岳による知礼の法身有相説への論難を載せるなか、次のようにある。

……此蓋大師所解三身、皆是有相。如二三十二相一、本是応身。不レ用レ現レ大、又是報身。不レ須二無相一、亦是法身。三身不分、一性何在。今謂、法身定無相（自受用同）、応身定有相（他受用同）。若其相即、俱相俱無相。又若拠二性徳三身一而論、斯則法身具二応身之性一。良由二法具一、方有二応身一。非レ謂三法性已有二応相一。如三摩尼珠具二雨宝之性一。性若不レ具、焉能雨乎。非レ謂三珠中已有二宝物一。若執レ此者、無レ有二是処一。霊味小亮云、生死之中本有二真神一。仏体万徳、咸具而為二煩悩所レ覆。若能断レ惑、仏体自現。章安引二古破一云、若言三衆生身中已有二仏果一、此則因中有果。食中有糞、童女有児等。当レ知、性徳応身尚無レ有レ相、況法身者乎。[9]

このように知礼の所説の三身はいずれも有相であり、かつ各々の相好による区別も不当であるとして批判を為す。その上で、基本として法身に相好を認めるべきでないと主張し、三身の相即の意味においてのみ「俱相俱無相」と言えるのであると説く。すなわちこの相即は飽くまでも性具によって成り立つことであるから、応身相が法身に相として具わると言うのは誤りであり、知礼の説を因中有果の常見に異ならないとして非難する。ここで仁岳が言うところの具性とは、あたかも摩尼珠が衆宝を現出させるが如き、不可思議な徳として捉えられていることが注意される。仁岳が何処から着想を得てこの譬喩を用いたのかは定め難いが、智顗においては前掲の『法華玄義』の箇所の他、『摩訶止観』巻五上・観不思議境の文にも如意珠喩を用いる例が見出せる。[10]これは不思議境を譬えて三喩を示す中に説かれたもので、ここに如意珠の妙用を説いて「不添不尽」とあるのについて、湛然は「非二本無今有一故不添、非二本有今無一故不尽。[11]」と解釈している。ここに知られるように、如意珠によって譬えられるところは本無今有や本有今無といった因果論に縛られない不可思議な相即関係である。従義もまた仁岳同様鏡像喩・如意珠喩を用いて空中無相・唯仮三千の義を表示している。『摩訶止観義例纂要』巻四には次のように言う。

……故知、他人若乃不レ許二心具三千不思議仮一、是則円頓空・中之理乃成二徒施一、却同三偏空不具二諸法一。猶如二頗黎不レ能レ雨レ宝也。若許二心具三千妙仮一、方顕三円頓空・中之理具二於妙仮不思議事一。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

猶如二明鏡万像炳然一也。鏡像喩レ仮也、鏡明喩レ空也、鏡体喩(12)レ中也。是則心具及以性具、但是妙仮耳。何得下濫作二空・中一説上之。

ここにおいて諸法差別相とは心具の妙仮であり、反対に寂滅の理である空・中は無相であるが、三諦の相即の観点に立つ時はこの差別相を必然的に具えていなくてはならない。もし心具三千の妙仮を認めなかったならば空・中の円頓理もまた徒説となり、偏空の見に異ならないものとなるとし、この譬えとして『法華玄義』巻八下の言を踏まえ、如意珠に似ては(13)いても衆宝を現出させる妙用の無い頗黎を挙げる。逆にもし心具三千の妙仮を認めたならば、あたかも明鏡が諸々の像を映すかのように、空・中の理体に三千の事相が具わり、三諦の円融を得るとする。このように鏡像・如意珠の譬喩は、一の理体と三千の事相という対立する二者を、三法の不一不異・不可思議の相即の下に帰せしむという意義を有するのであり、これによって無相の真如境と有相の差別境とはその対立を厳然と保ちつつも相即することが可能になるのである。今回扱ったところの対立する二辺の不可思議な相即もやはり智顗以来認められるものであり、当体全是の即義や具相説等に代表される知礼の創見によって、かかる相即の義が顧みられなくなったことも事実である。仁岳・従義の主張もまた矢石の争いにおける偏向の説であることは明らかにせよ、殊にその相即義の復古については大いに評価に値する功績であると考える。

1 『天台性具思想論』二三八頁、法蔵館・一九五三年。
2 『天台性具思想』二二七頁・二五三頁、東大図書公司・一九九七年。
3 『十不二門指要鈔』巻上、大正四六・七〇七頁上中。
4 大正三四・一七一頁中。
5 続蔵（新文豊版、以下同じ。）一〇一・一八四丁右上。
6 大正四六・一七五頁上。
7 大正四六・九頁上。
8 大正三三・七四二頁下。
9 続蔵九五・四〇六丁右下―四〇七丁左上。所引の灌頂の文は『大般涅槃経玄義』巻下、大正三八・一〇頁上中。
10 「如二如意珠天上勝宝一。状如二芥粟一、有二大功能一。浄妙五欲、七宝琳琅。非二内畜一、非二外入一。不レ謀二前後一、不レ択二多少一。不レ作二麁妙一、称レ意豊倹。降雨穰穰、不添不尽。蓋是色法尚能如レ此、況心神霊妙。寧不レ具二一切法一耶。」（大正四六・五五頁下）。宗印撰『北峰教義』に引かれる仁岳の『義学雑編』には観不思議境の三喩を心具三千によって解する箇所が見える（続蔵一〇一・二三四丁左上）。
11 『止観輔行伝弘決』巻五之三、大正四六・二九九頁上中。
12 続蔵九九・二四三丁左下。
13 大正三三・七八一頁下―七八二頁上。

〈キーワード〉 後山外派、唯仮三千、鏡像喩、如意珠喩

（早稲田大学大学院）

NII-Electronic Library Service